

●九州国立病院機構施設のAiの現状と救急医療施設における経験

国立病院機構 熊本再春医療センター | 井手口大地

多くの施設ではAutopsy imaging (Ai) 件数は少なく、施設によって運用や撮影プロトコル等が異なる。本稿では、九州国立病院機構施設におけるAiの現状と筆者が経験した救急医療施設での運用について報告する。施設による違いを標準化するためには、Aiに興味を持ち、知識を有する人材を増やしていくことが重要である。

Autopsy imaging is less in many hospitals, rules and protocols are different. We report Autopsy imaging at the Kyushu National Hospital organization and rules at emergency medical hospitals. It is necessary to increase the number of Autopsy imaging specialists for standardization.

● はじめに

国立病院機構は全国に140病院の約53,000病床、九州では28病院の約10,000病床を有している国内最大規模の医療ネットワークである。病院形態も高度先進医療や災害医療、国際的感染症や政策医療など多岐に渡り、施設の規模やスタッフ数、保有装置も様々である。国立病院機構では人事異動があり、筆者も3つの救急医療施設に所属し、死亡時画像診断Autopsy imaging(Ai)に従事してきた。2015年10月に施行された医療事故調査制度^{1,2)}によって証拠保全としてAiの必要性・重要性が着目されているが、ほとんどの施設ではAiの件数は非常に少なく、運用や取り決め、撮影プロトコル等が異なる。そこで現状を把握するため、2018年に九州国立病院機構診療放射線技師会として九州国立病院機構施設のAiに関する実態調査を行った。本稿では、その調

査結果を踏まえた九州国立病院機構施設におけるAiの現状と筆者が経験した救急医療施設での運用について報告する。

● 調査概要

本調査は、九州国立病院機構診療放射線技師会CT部会の調査研究として実施し、対象は国立病院機構九州グループの33施設(国立ハンセン病療養所5施設含む)、Microsoft Excelを用いた選択または記述でのアンケート形式とし、施設代表者による任意回答とした。調査期間は2018年3月13日～2018年3月31日までとし、調査項目は「Ai実施状況」「運用取り決め」「Ai-CT撮影」「小児Ai」「その他」とした。本稿では結果の一部を抜粋して報告する。

● 調査結果

回答は26施設から得られ、回収率は

78.8%であった。

「Ai実施状況」として、Aiを実施している施設は21施設(80.8%)であった。2017年におけるAi-CT実施件数および内訳について(図1)に示す。年間50件を超える施設が5施設、うち2施設は100件を超えていたが、ほとんどの施設は10件未満であった。また、全体における内訳として院内死亡例が194件(31.0%)、救急CPAが372件(59.5%)、警察依頼が58件(9.3%)、解剖の補助が1件(0.2%)であった。また、Ai-XPは2施設(22件および1件)、Ai-MRIは1施設(1件)実施されていた。Aiに使用する装置・機器は、21施設全てが診療に使用する装置であった。Aiを実施している時間帯については、「時間に関係なく随時対応」が8施設(36.4%)、「状況を確認して呼出対応」が13施設(59.1%)、「業務終了後(時間外)に対応」が1施設(4.5%)であった。ガイドラインによれば、Aiの実施は他の一般患者等に配慮し始業前または診療終了後が望ましいとされている³⁾が、実際にはエンゼルケアやご遺族への